

環境の要素を、

林地、耕地、草地、湿地、灌性植生、水疎、裸地、水系裸地、その他の8つの要素に区分しました。これは1978年の第2回調査で使用した区分です。鳥類の生息環境を知るだけでなく、今回の調査結果と前回、あるいは次回と比較します。これによって、調査コースの環境がどのように変化してきたかを、おおまかに知ることができます。

調査コースの環境の調査を行なう時に、参照して下さい。(p14およびp20～21)。  
調査コース地図から、おおよその環境は予測できるので、事前に該当する区分には目を通して下さい。

#### A. 林地

1. 「広葉樹林」は、林冠面積のおおよそ90%以上が広葉樹によって占められている林地をいう。
2. 「針葉樹林」は、林冠面積のおおよそ90%以上が、針葉樹によって占められている林地をいう。
3. 「混交林」は、上記の「広葉樹林」、「針葉樹林」のいずれにも該当しない針広混交林をいう。
4. 「低木林」は、樹高がおおよそ2 m以下の低木よりなる林地をいうが、森林の下層植生として存在する場合は、「低木林」としては扱わない。

#### B. 耕地

1. 「畑地」には苗圃を含める。
  2. 「水田」は、現実に稲作されている状態のものをさす。休耕田は、その状態を適直判断し、C.草地、D.湿地植生、あるいはG.水系裸地として扱う。
- \* 苗圃は木、草の育苗場。

#### C. 草地

湿地、沼沢地以外に成立する草地をいう。

1. 「背の低い草原」は、シバ群落、オオバコ群落、放牧草地などの草丈の低い草原をいう。
2. 「背の高い草原」は、ススキ群落、ヨモギ群落、セイタカアワダチソウ群落など草丈の高い草原をいう。
3. 「伐採跡地」は、伐採跡地の草地を意味するが、人工造林地であっても、立木の被度がおよそ50%に満たない場合は、伐採跡地として扱う。
4. 森林の林床植生としてのササ群落は、「ササ原」としては扱わない。
5. 「雪山草原等」には、高山ハイデ、風衝草原等の寒帯・高山部に成立する草原を含む。
6. 「道路法面(草地状)」は、道路の切取法面あるいは盛土法面のうち、草地状になっているものをいう。(道路の横断面図を参照)

岩盤の切取法面などのように、植生がほとんどみられない法面は、F.裸地として扱う。

#### D. 湿地植生

湿地、沼沢地に成立する植生をいう。

1. 「背の低い湿地植生」は、ミゾソバ、ミクリ等の草丈が比較的低い植物よりなる湿地植生をいう。
2. 「背の高い湿地植生」は、ヨシ、オギ等の草丈が比較的高い植物よりなる湿地植生をいう。

#### E. 水域

水域は、湿地植生、干潟等を除いた開放水面をいう。

1. 「河川」には人工の運河等も含める。
2. 「池」「湖」には人造湖も含める。

#### F. 裸地

海岸地帯、河川敷の裸地は、次のG.水系裸地で扱う。

1. 「岩石地」は、高山帯の岩石地、火山上部の無植生地、及びいわゆるハゲ山等をいう。

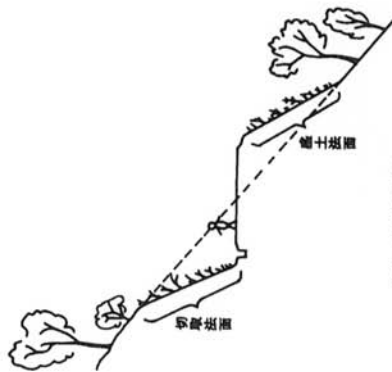
#### G. 水系裸地

海岸地帯、河川敷の裸地をいう。

1. 「干潟」には、河口付近の泥質の河川敷(低水路)を含める。
2. 「砂浜」には、砂利浜、岩石浜、河川敷(砂利・岩石)を含める。
3. 「崖地(自然のもの)」は、河蝕崖、海蝕崖等の自然に成立した水辺の崖地の内、植生のない状態のものをいう。
4. 「干拓地」は、干拓直後の植生のない状態のものをいう。
5. 「岩礫よりなる島」は、島全体に、ほとんど植生のないものをいう。

#### H. その他

1. 「都市」と「村落」との区別は、下記による。  
(1/2.5万地形図上での表示の差)  
都市：建物の密集地として表示されている。  
村落：黒箱家屋で、一戸一戸表示されている。
2. 「工場地」は、建物の密集地あるいは、黒箱家屋のいずれで表示されるものであっても、工場である場合は、すべて工場地として扱う。
3. 「都市公園(疎林状)」は、芝生、植栽木からなる疎林状態の都市公園をいう。  
都市公園であっても、ある程度の規模があり、森林植生として成熟に近いと判断されるものについては、適直、A.林地として扱う。



道路の横断面図

## ■ 繁殖可能性の基準

繁殖可能性の基準は以下のとおりとし、その区分はa～fのランクの表示で表わします。

- | ランク | 繁殖可能性の基準                               |
|-----|--|
| a   | 繁殖を確認した。                               |
| b   | 繁殖の確認はできなかったが、繁殖の可能性はある。               |
| c   | 生息を確認したが、繁殖については、何ともいえない。              |
| d   | 姿・声を確認したが、繁殖の可能性は、おそらくない。              |
| e   | 生息は確認できなかったが、環境から推測して、繁殖期における生息が考えられる。 |
| f   | f* 繁殖期における生息を確認できず、繁殖については何ともいえない。     |
- \*fランクについては、a、b、c、d、eランク以外のものに相当します。

現地調査及びアンケート調査時の鳥類の観察事項による繁殖の可能性は、下記の「ランクの判定」によります。

## ■ ランクの判定

## ・観察された種類について

現地調査/アンケート調査で観察された鳥類のランクの判定には、次頁の「観察事項の判定項目」を用います。「観察事項の判定項目」では、観察の対象（成鳥、巣、ヒナ）とその観察事項によって、ランクを決定します。観察コードは、観察事項の記述を簡略化したものです。

## ・観察されなかった種類について

観察されなかった種類については、上記の繁殖の可能性の基準のe、fランクを使用します。fランクについては、a、b、c、d、eランク以外のものに相当しますので、記述をしないことをもって、fランクといたします。（繁殖状況票に記入するとき）



対象	観察事項	観察コード <sup>*</sup>	ランク
成鳥に ついて	成鳥が巣あるいは巣のあるらしい所にくり返し入り出している。	10	a
	成鳥が幼卵又は抱雛している。あるいははしているようだ。	11	
	成鳥が巣のあるらしい所にとびこむと同時にヒナの叫をねだる声がかかれた。	12	
	成鳥がヒナのフンを運搬している。	13	
	成鳥が巣のヒナに餌を運搬している（餌をくわえたまま観察者を警戒し移動する気配のない場合を含める）。	14	
	擬態をみた。	15	
	その巣が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツツキ類のドミングを含める）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。	30	
	求愛行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。	31	
	交尾行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。	32	
	威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナの存在が考えられる。	33	
	巣があると思われる所に成鳥が訪れた。ただし、そこが巣（ねぐら）である場合は除く。	34	b
	造巣行動（巣穴掘りを含む）を見た。	35	
	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに同一メッシュ内に巣を構えていると思われる場合に限る。	36	
	成鳥がヒナへの餌を運搬しているが、巣が同一メッシュ内にあるかどうかかわからない。	37	
	その種が営巣し得る環境で、繁殖期にその種を確認したが、他には繁殖の兆候が認められない。	50	c
繁殖期に鳴き声を確認したが、さえずりかどうかかわからない。	51		
その種の生息を確認したが、そのメッシュ内にその種が営巣し得る環境はないと思われる。 例) アマツバメ類、ワシタカ類の上空通過を確認したが、そのメッシュ内には営巣可能な環境はないと考えられる場合。	60	d	
巣に ついて	巣立ち後の巣がある。ただし1997年以後に使用された巣であること。	16	a
	卵のある巣をみた。	17	
	成鳥がおちついてすわっている巣の近くで、その種が営巣し得る環境でその種の卵殻がみつかった。	18	
	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥がそこに来るのを認めなかった。ただし、1997年以後に作られた巣であること。	38	b
	ヒナのいる巣をみた。	19	
ヒナに ついて	ヒナの声をきいた。	20	a
	巣からはほとんど移動していないと思われる巣立ちヒナをみた。	21	
	かなり移動可能と思われる巣立ちヒナを見た。	39	b
	家族群を見た。	40	

観察事項の判定項目・修正版

資料 6

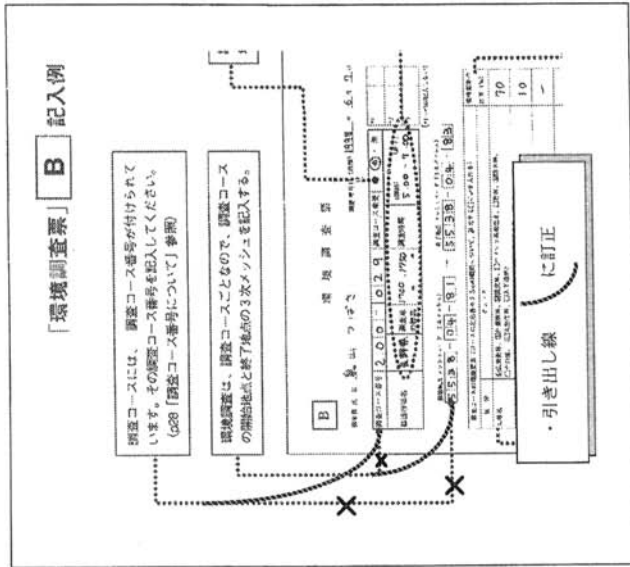
対象	観察事項	観察コード	ランク
	成鳥が巣あるいは巣のあるらしい所にくり返し入りしている。		10
	成鳥が抱卵又は抱雛している。あるいははしているようだ。		11
	成鳥が巣のあるらしい所にとびとむと同時にヒナの餌をねだる声がかかれた。		12
	成鳥がヒナのアンを運搬している。	a	13
	成鳥が巣のヒナに餌を運搬している（餌をくねわせたまま観察者を警戒し移動する気配のない場合を含める）。		14
	糞害を見た。		15
	その種が営巣し得る環境で繁殖期に、その種のさえずり（キツツキ類のドラミングを含め）を聞いた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。		30
	求愛行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。		31
	交配行動をみた。ただし、その鳥が冬鳥、旅鳥かもしれない時は除く。		32
	威嚇行動、警戒行動により、付近に巣又はヒナの存在が考えられる。		33
	巣があると思われる所に成鳥が訪れた。ただし、そこが雌（むぐら）である場合は除く。		34
	遊蕩行動（巣穴掘りを含む）を見た。		35
	成鳥が巣材を運搬している。ただし、明らかに同一メッシュ内に巣を築いていると思われる場合に限る。		36
	成鳥がヒナへの餌を運搬しているが、巣が同一メッシュ内にあるかどうかかわからない。		37
	その種が営巣し得る環境で、繁殖期にその種を確認したが、他には繁殖の兆候が認められない。ただし冬鳥または旅鳥は、過去にその地方で繁殖の記録があるもの。		50
	繁殖期に鳴き声を確認したが、さえずりかどうかかわからない。		51
	その種の生息を確認したが、そのメッシュ内にその種が営巣し得る環境はないと思われる。 例）アマツバメ類、ワシタカ類の上常通過を確認したが、そのメッシュ内には営巣可能な環境はないと考えられる場合。		60
	冬鳥または旅鳥で、繁殖期に生息がみられたが、過去にその地方で繁殖の記録がないもの。		61
	巣立ち後の巣がある。ただし1997年以後に使用された巣であること。		16
	卵のある巣をみた。	a	17
	成鳥がおちついてすわっている巣の近くで、その種が営巣し得る環境でその種の卵殻がみつかった。		18
	巣を発見したが、卵、ヒナともなく、成鳥がそこに来るのを認めなかった。ただし、1997年以後に作られた巣であること。	b	38
	ヒナのいる巣をみた。		19
	ヒナの声を見た。	a	20
	巣からほとんど移動していないと思われる巣立ちヒナをみた。		21
	かなり移動可能と思われる巣立ちヒナを見た。	b	39
	家族群を見た。		40

※下線の部分新増追加項目 (この表をマニュアルのp35に貼って差し換えて下さい)

< 正誤表 >

●P18 「調査地の標高：」の行  
「調査地の標高：記録をとった調査コースの標高と…」を「…とった3次元メッシュの標高と…」に  
訂正（アンダーライン部分）。

●P21 「環境調査票」B記入例で、引き出し線の訂正



●P23 「アンケート調査票C記入例」で  
枠内「種名コード」は、「種名コード」（p26～27）参照。』は削除。  
※種名コードは、記入しなくてもかまいません。

●P27 資料1、種名コードの種名訂正（アンダーライン部分）  
・「464 オジロヒタキ」 「464 オジロビタキ」  
・「518 ギンザシマシコ」 「464 ギンザシマシコ」

●P35 「資料6 観察事項の判定項目」は一部追加修正  
別紙「資料6 観察事項の判定項目」修正版 参照

なお下記の訂正（アンダーライン部分）については、別紙「資料6 観察事項の判定項目」修正版で訂正済み。  
・「観察コード 30」の「その種が営巣～」を「その種が営巣～」に訂正。



< 調査事務局スタッフ >

塚本 洋三	(財)日本野鳥の会	学術顧問
金井 裕	(財)日本野鳥の会	自然保護室
神山 和夫	(財)日本野鳥の会	自然保護室
成末 雅恵	(財)日本野鳥の会	自然保護室
北村 昭彦	(財)日本野鳥の会	自然保護室
越澤 智恵	(財)日本野鳥の会	自然保護室
黒沢 令子	(財)日本野鳥の会	嘱託研究員
矢野 正則	(財)日本野鳥の会	嘱託研究員
松野 葉月	(財)日本野鳥の会	嘱託研究員
林 美希	(財)日本野鳥の会	自然保護室研修生
佐藤 友香	(財)日本野鳥の会	自然保護室研修生
川那部 真	(財)日本野鳥の会	会員

**第6回自然環境保全基礎調査**

**生物多様性調査 鳥類繁殖分布調査 報告書**

平成16(2004)年3月

**環境省自然環境局 生物多様性センター**

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1

電話：0555-72-6033 FAX：0555-72-6035

業務名 平成14年度種の多様性調査鳥類生息分布調査報告書原稿作成等業務

編集 財団法人 日本野鳥の会

〒151-0061 東京都渋谷区初台 1-47-1 小田急西新宿ビル1F

電話：0425-936-871 Fax：042-593-6873